

令和7年度 産業建設常任委員会 行政視察報告書

【視察期間】

令和7年11月5日（水）～11月7日（金）

【視察先】

宮城県大崎市、福島県双葉郡富岡町、宮城県仙台市

【視察目的】

- (1) 「感覚ミュージアム」について（宮城県大崎市）
- (2) 震災と原発災害の記録を学ぶ（福島県双葉郡富岡町）
- (3) 廃炉事業の現状を学ぶ（東京電力ホールディングス(株)）
- (4) 「観光シティループバス るーぷる仙台」について（宮城県仙台市）

【視察参加委員】

北原偉男、平川美由紀、古川昌俊、佐々木雅宏、坂野智、
佐々木昭、吉谷徹

【視察内容】

(1) 宮城県大崎市

- 視察目的：「感覚ミュージアム」について
- 日時：令和7年11月5日（水）13：30～
- 対応者：NPO 法人 オープンハート・あったか
副理事長 千葉明美 様
事務局長 上原茂樹 様

●説明要旨：

* 2000年にオープンした感覚ミュージアムは、大崎市の指定管理者制度で「NPO 法人オープンハート・あったか」が管理運営。

* 人間が持つ五感をテーマにした日本初の体験型の美術館。

* 高齢社会において総合的に保健・医療・福祉施設の整備計画のもと、だれもが安心と生きがいをもって暮らせるまちづくりを目指す「あったか村整備構想」を策定し、多世代の交流の場、新たなコミュニティの核として活用されるよう整備された施設。

* 宮城県岩出山町あったか村構想

高齢社会到来を間近に控え、厚生省から「ふるさと21健康長寿のまちづくり事業」の指定を受け、「岩出山町高齢者福祉基本計画」を策定。“だれもが安心と生きがいをもって暮らせるまちづくり”を目指す「あったか村整備構想」を打ち出した。感覚ミュージアムは、その構成要素の一つとして建立。

* あったか村

あったか村には、感覚ミュージアムの他、特別養護老人ホーム、ケアハウス、病院、地域福祉センター、ふれあい農場、及び岩出山診療が存在。

* 体験型美術館「感覚ミュージアム」

感覚をテーマにして美術館。感覚には、視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚に分けられる。

現代の情報化社会では視覚の働きに左右されることが多いように思われる一方、視覚が遮られたときの研ぎ澄まされた感覚・記憶などもある。感覚ミュージアムでは、これらの眠っていた感覚を呼び覚ます。

* 療養におけるスピリチュアルな役割

病氣療養において、医術以外の精神的な方向から回復を促す。

● 質疑応答：

《質疑》 年間入館者数

《応答》 令和6年度は49,804名（前年度比17%増、約7,300名増）

《質疑》 リピーター率

《応答》 約30%の方は癒しの空間として現代の神社にお参りに来る感覚で2~3回来館されている。

SNSや体験プログラムの充実が再訪につながっている。

《質疑》 入館者の年齢層

《応答》 20代~30代のカップルや結婚したてのファミリーが80%~90%を占める。

《質疑》 運営財源の構成

《応答》 入館料と指定管理料が中心で、自主事業収入の割合を今後拡大していく方針。

《質疑》 指定管理料

《応答》 2,550万円

《質疑》 ランニングコスト

《応答》 約750万円

《質疑》 館内設備の更新はされるのか。

《応答》 逐次行っている。

《質疑》観光振興につながっている要因はどのようなことでしょうか。

《応答》日本に一つしかない分野のミュージアムということ並びに岩出山など地域の特質を活かしているところにあると考える。

《質疑》2011年の東日本大震災の被災状況について、展示物などの被害とその後の復旧について教えてください。

《応答》ここは震度5強でしたが、もの凄く杭をばんばん打っているので、建物に対する被害はほとんどなかった。
10日後には再開することができた。

●感想：

▼本ミュージアムは、地域の特色も一部活かした体験型施設でした。運動感覚、聴覚、嗅覚、時間間隔、触覚、日常感覚など人が日常に感じることができる感覚を一定の制限のもとに研ぎ澄まして感じることができる特殊な空間であったと思います。

これは観光としての目的に止まる体験型施設ではなく、医療を精神的な側面からも支えることができるとの説明も受け、岩出山町あったか村構想の一部として病院や特別養護老人ホームと併設されている意義が良く理解できました。

当市においても感覚的に安らぎを得ることによる体調不良からの脱却について検討されてもよいのではないかという印象を受けました。

▼感覚ミュージアムがある大崎市岩出山地区は、数多くの遺跡や史跡を有する水に囲まれた城下町です。

感覚ミュージアムは、2つのJR駅の間際に位置しており、どちらからも徒歩で10分かからずに行ける、立地環境の良い場所にあります。近くには、国指定史跡・名勝の「旧有備館および庭園」もあり、ゆっ

くりと町中を散策しながらのんびりと過ごすことができます。

感覚ミュージアムは、見る、聞く、触れるといった感覚体験を通し、感じるチカラに磨きをかけ、想像力を高めることができるミュージアムです。

年齢や性別、障がいのあるなしに関わらず、すべての人が分け隔てなく気軽に利用できる施設で、インクルーシブの考えに基づいた施設だと思いました。

入館者に若い人が多いのも魅力的です。

千歳市には人気の水族館がありますが、他にも若者が集まる施設があると、もっと賑わいのあるまちになるのではないかと思います。

新たな観光資源となる施設の整備を検討してはどうかと考えます。

▼感覚ミュージアムの取組から、五感を通じて楽しめる体験型施設が、世代や国籍を問わず来館者を惹きつけることを実感した。

単なる展示ではなく「体験」を提供することが、地域観光のリピーター獲得や滞在時間の延長につながる点は、今後の観光施設整備においても参考になると感じた。

▼宮城県大崎市岩出山の「感覚ミュージアム」は、地域資源を活かした文化・教育拠点としての施設でした。五感をテーマにした体験型展示は、子どもから高齢者まで幅広い世代に対応しており、観光・教育・福祉の融合モデルとして参考になります。特に、来館者の主体的な参加を促す展示構成や、バリアフリーへの配慮が行き届いており、誰もが楽しめるユニバーサルデザインが実現されています。また、地域住民との協働によるイベント運営や学校との連携も進められており、地域の交流促進や人材育成に寄与しています。地方における文化施設の持続的運営の好例として、今後のまちづくり施策に活かせる視察となりました。

▼感覚をテーマとした体験型施設ではあるが、25年前に建設されたのはびっくりである。当時としては、かなり斬新であり、集客が心配された施設ではなかっただろうか。

指定管理料含め、収支 5,000 万円前後となるが、美術館も兼ねる、教育、知育的施設と考えれば、一定程度の評価はできるのではなかろうか。

年次的、中期的な、展示品や体験五感遊具等、飽きられない施設への計画的リニューアル、は考えているのかの質問には……そうありがたいが特殊なもの故、金がかかりすぎる、各種各般、現場の様子を捉え、その都度協議して進展させる。

この種の美術館、特殊物、五感に対応する施設の整備物も高価なものになる。中期的計画は必須ではないだろうか。

箱まるごと五感の美術博物館で、行くたび潜在する違う五感に出会えるのは、すばらしい施設とおもう。

氷涛 氷の美術館に聴覚、嗅覚をチョイス、テイストできると、表現の受け止めが変化にとんで良いね。

▼施設のコンセプトとして人間の感覚を刺激するための工夫が各所に収められており、隣接する保育園や福祉センターとも協力関係を作りリハビリ等にも貢献している施設だとお聞きしました。施設の展示品一つ一つに感心するとともに、静かな空間の中で心が落ち着く雰囲気や、あえて様々な臭いを感じる場所、音を感じる場所、体を動かして絵を書いていく体験の場所、鏡による視覚体験の場所、光と影をモチーフとした場所や暗闇の中で手の感触により少しの恐怖感とドキドキ感を体験し、千に及ぶ引き出しを一つずつ開けていく期待感という感覚も新しい体験でした。

▼視覚に頼りがちな現代で、視覚が制限された時の他の感覚を呼び覚まして引き出す体験ができる体験型美術館である。

そうした部分で見ればユニークな博物・美術施設だなあと思うに留まったと、個人的にも感じる。

ただ、副理事等の館関係者からは「周囲に農園や病院、保育施設も併設した、町のあったか村づくりという計画があって、ここが岩出山地域での総合的な福祉拠点なのです。」

「福祉拠点に人…子ども、親、お年寄りも集う中、発育のためであったり病気等のリハビリだったりするかもしれないですが、視覚・嗅覚・触覚・聴覚を通じて心が成長したり癒されたりする場であってほしいという思いもあります。」

このようなお話もいただいたので、体験を通じ地域の癒しの場としての役割も果たす場といった、もっと視野の広い目的の施設なのだと思います。思いながら施設見学をすることができた。

また、「施設のマークにも、手、耳、目、鼻、口といった5感を表現したものを埋め込む中、ハート(心)に働きかけるからハートのマークも入っているのです。」という趣旨の説明も入館前に受けたので尚のことである。

体験を通じて単に楽しむだけでなく、発展した目的が更にあれば施設の存在意義ももっと強固になる、体験後に前述したような説明等を聞くことで、癒しを含め心に刺さった方にはずっと心に残り続ける施設になるとも思ったところである。

千歳市にはこうした体験型美術館といったものも含め、博物館施設が少ないとは言わないが施設の印象や力というようなものが弱く、文化振興が弱い側面の街という印象を私は持っている。

では博物館施設や文化振興施設を作ったからそこが変わるのか、というとそれも違う、もっとその先の何かがないと続かないと思って

いたところであった。

博物館や美術館をきちんと作ろうと提示する場合は、この視察で掴んだ「地域と一体になった」「体験以上にその先にあるもの」を見て将来性のある施設になるのかという部分も考えて、一般質問や委員会質疑に活かそうと思ったので、視察目的は十分達成されたと考える。

(2) 福島県双葉郡富岡町

●視察目的：震災と原発災害の記録を学ぶ

●日時：令和7年11月6日（木）

10：40～（とみおかアーカイブ・ミュージアム）

14：55～（富岡町文化交流センター「学びの森」）

●対応者：富岡町長 山本育男 様

富岡町企画課長 畠山信也 様

富岡町企画課広聴広報係長 猪狩英伸 様

富岡町企画課 幸田恵汰 様

●説明要旨：

◎とみおかアーカイブ・ミュージアムを視察見学

* 富岡町の成り立ちと複合災害がもたらした地域の変化を伝える「3.11 伝承ロード震災伝承施設」。

* 2021年にオープンし、今年の8月に来館者が10万人を超えた。

* 2011年3月11日まで日常があったふるさと（富岡町）を想い、まもり、つなげる、拠点施設。

* 富岡町を中心とした地域の歴史と特徴を伝える。

* 古くは漁業等により生計を維持。

* 東京電力が原子力発電所を設置以降は発電所勤務が急増。

* 2011年3月11日の大震災により発生した津波により原発事故が発生し、全町避難を余儀なくされた。

* 避難指示継続時から自然災害からのインフラの復旧や除染などの取り組みを継続。

* 2017年4月1日から一部区域を除いて避難指示が解除され、住民の居住が始まるなど復興再生へ向けた取り組みが続いている。

* アーカイブ・ミュージアムでは、主に震災遺品などを展示し、被害

を後世へ伝える努力をしている。

◎富岡町文化交流センター「学びの森」で座学

- * 富岡町の成り立ち
- * 東日本大震災の経験
- * 復旧・復興への歩み
- * 帰還困難区域の復興・再生
- * 富岡町の復旧・復興

東日本大震災発生から復旧・復興（地震・津波、原子力発電所事故、全町長期避難）に向けた取り組み。

- * 岩手県のような巨大防波堤の建設はないが、3断構え防波堤により津波を防ぐ。

●質疑応答：

《質疑》若い世代への継承に向けた取り組み

《応答》戦後の貧しい時代に海水を煮詰めて塩をつくり、それを税金として納めていたという証言記録から、大学生の皆さんと塩炊きのワークショップを開催。

将来、博物館で働きたいという学生さんと一日かけて、準備から片付けまで全部含めてやってみるという取り組みをしている。

《質疑》施設を運営する中で苦労している事

《応答》復興事業も大事だが、少しずつ戻って来ている子どもたちに、生活の糧となり、地域の事をもっと知ってもらえる場所になるようにしていきたい。

《質疑》展示に住民の声をどのように反映しているか。

《応答》定期的に町民ヒアリングを実施し、証言映像や写真資料を更新している。

《質疑》教育現場との連携は。

《応答》修学旅行や防災教育の教材としての活用が増加しており、他自治体からの視察も多い。

《質疑》行政職員の人数は足りているのか。

《応答》震災当時は約 140 名、今は約 200 名で、全国から応援の職員の方に来ていただいている。

●感想：

▼町の小高い丘陵の上に建設された本ミュージアムの玄関で、山本町長の出迎えを受けました。

全町避難から 8 年前に一部地域を除き避難指示が解除されたものの、未だ東日本大震災は続いていると痛感せざるを得ない町の状況であり、そのことを世界に発信しようとしている施設であると感じました。

大震災を乗り越えて町の姿を残そうとする本ミュージアムは、謂わば郷土資料館とも言える存在であり、本市にとっても、空港 100 年を迎え、また、ラピダスの進出により変わろうとする今こそ市の歴史や変わりゆくであろう姿を残していく努力が必要ではないかと思えます。

▼福島県富岡町は、明治時代に双葉郡役所や税務署が置かれて以来、官公庁が多く立地しており、震災前には 16,000 人の町でしたが、簡易裁判所、労働基準監督署、法務局、県合同庁舎、警察署、消防署などが集中し、官公庁の町と言われていました。

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災において、地震、津波、原発事故の複合災害により、長期にわたって町外での避難生活を余儀なくされました。

帰還困難区域がまだ残っていることから、富岡町の皆様のご健康

と一日も早い復興を祈ってまいります。

近年、自然災害が多発していることから、千歳市においても発災時の自助共助の対応や、まちの復興・再生への取り組みについて大変勉強になりました。

▼富岡町アーカイブ・ミュージアムでは、震災と原発災害の体験を住民自身の言葉で伝える姿勢に感銘を受けた。記録を「保存」するだけでなく、「伝える」「考える」ための場として整備されており、防災教育や地域学習の拠点として極めて重要な役割を果たしていると感じた。

▼福島県富岡町の「富岡アーカイブ・ミュージアム」は、東日本大震災と原発事故の記録を後世に伝える重要な施設であり、地域再生と風化防止の両面で高い意義を持つことを確認しました。展示は被災当時の状況、避難生活の記録、復興への歩みを多角的に紹介しており、映像や証言などを通じて町民の経験をリアルに伝えています。特に、地域住民の協力による資料収集・展示更新の取組が印象的で、行政と住民が協働して記憶を守る仕組みとして学ぶ点が多くありました。教育機関や他自治体との連携も進められており、防災・減災教育の拠点としての機能も期待されます。震災の教訓を地域政策に活かすうえで、極めて有意義な視察となりました。

福島県富岡町の研修では、東日本大震災および原発災害からの復旧・復興の歩みと、将来を見据えた新たなまちづくりの取組について詳しい説明を受けました。町は長期避難や人口減少といった深刻な課題に直面しながらも、「安全・安心な暮らしの再生」と「持続可能な地域社会の構築」を目標に、インフラ整備や住宅再建、企業誘致、教育・福祉環境の充実などを着実に進めているとのことでした。特に、

若い世代の帰還促進や新産業創出への挑戦など、未来志向の姿勢が印象的でした。職員の方々の熱意と使命感に触れ、復興の現場での行政の役割と、地域住民との協働の重要性を改めて認識する有意義な視察となりました。

▼自然の猛威、人的被害の惨状、二つの災いはまだまだ終わってなんか無いのだ。

あのときのまま止まっている現状も多くあることもあらためて知らされた。

富岡文化交流センターまなびの森は、木を基調に広い空間活用で明るい。アウトとインの融合活用、清潔感ありあり、小イベントに使い勝手が良い。千歳駅裏のライブラリーにしたい施設だ。

▼アーカイブ・ミュージアムでは富岡町の歴史と東日本大震災による地震と津波の災害と原発事故による放射能汚染による被災という大きな災害を一度に経験したことでした。震災から15年を経過した今でも地域復興は進んできたものの人口の回復は震災前の16%という現実になっています。施設の中には過去の街並みを復元したミニチュアが展示されおり、町に戻ってきた人たちが過去を懐かしみ、伝言版に書き込む事で元町民の皆さんが存在している状況を共有することができる事も良い取り組みであると感じました。歩道橋に掲げられた横断幕が復元展示され「富岡は負けん！」の印象が心に残りました。

▼東日本大震災、原発事故…当時報道される中で地震、津波、原発事故といった大災害に複数見舞われた場所として見聞きしていた町という部分は覚えていたが、悲惨なことがあって痛ましい地かなと、赴

くまでは思っていた。

見学する中で…津波で流され上げたパトカー、町民避難指示をする役場の現場展示も踏まえて、凄惨な当時の現場、避難までのこと、避難してからのこと、今の復興状況がきちんと伝わる博物館施設であったと見学して感じた。

ただ、それ以上に、その地を知らない者が、報道だけ見ると本当に町のそれまでの歩みや町の人々の心情を断片的にしか捉えきれていないのだとも強く思い知らされたものでもあった。

学校の子どもが親の仕事と聞かれると、7割くらいは原発仕事関係者であったという話も受けつつ、富岡町の人々の仕事や経済の基盤になっていたからこそ、町の人々も誰彼問わず原発に対して単に否定的ということもなく、一緒に歩んできたという関係性を知ることができた。

世間では、原発のない地域の者が「原発反対」と声高々に荒らげる様子もあるし、私もそうした活動をする者でもある。

勿論、放射能を放出する物質の安全管理には高度な管理技術だけでなく事故の備えがなければ、火力発電等の他の発電施設と違い生物が踏み入れない死の環境が形成されてしまうばかりでなく復旧も容易でないため、人類が安易に取り扱ってよいものではないという考えは変わらない。

その上で、報道だけではわからない、その地域の歩みや人々の思いを知らないまま言うのはなんと薄っぺらなものかとも思ったのである。議員活動では、地域の人々の声を大事に扱うという思いでやってきたが、今以上に見聞きして考え、単に反対だとかだけではなく、両方の立場を尊重していかなければならないと思ったところである。

観光や産業を創る支える地域の人々の思いを見聞きして現場を知るといふ、観光や産業の根幹で何を大事にしなければいけないのかということを見直し再認識する視察であり、視察目的は十分達成されたと考え

る。

余談だが、施設を支える学芸員等の教育も積極的に行っており、地域の古で行われていた海水から塩を作る実習もやっていて、目の前で実演され、文化を間近で知る機会が出来で良かった。

施設のことは少しだけ解説の中で触れられたが、複合災害の状況や苦勞を座学で教えていただいたものである。

解説を担当された方が…震災当時を知る者で、災害復興計画づくりに携わり、R5まで帰還困難区域に指定されていた地域があるが、新居を構えた当日に災害が発生して帰還困難区域になる…という本当に当時から町の歩みを知るエキスパート生き字引みたいな方というのが印象深かった。

他の委員からは、災害復興交付に関するお金が入る前と今の予算や新規就農等の助成が重複して使えるのかといった質問が挙がっていた。

座学を受ける中で、帰還困難区域が数年も続くと何故復旧が進みにくいのかということ、住居の現状や野生化した家畜やペットの状況を含め詳細を理解するとともに、現在もまだ帰還困難区域が一部残っており帰れない人々も残っていることを知ることとなり、大規模災害でどういったことが後に発生するのか、激甚災害が複合するとどうなるのか、原発事故の発生で周辺地域がどうなるのかについても以前より深く理解することとなった。

今後千歳市では、ラピダス工事作業に関わる従事者等で市民以外の方が長期的に多く滞在する環境になる。

その中で、胆振東部地震レベルの災害が発生したときに市民以外の

方の避難をどうするのか、長期被災となった時に何を備えなければ
ならないのかといったことを進言する際に、このとき学んだことが
活かせるのではないかと思う。

とみおかアーカイブ・ミュージアム、廃炉資料館の見学の上でこの座
学で補完された上で、この視察目的は十分達成されたと考える。

(3) 福島県双葉郡富岡町

- 視察目的：廃炉事業の現状を学ぶ
- 日時：令和7年11月6日（木）13：30～
- 対応者：東京電力ホールディングス(株)
福島復興本社 廃炉資料館グループ
グループマネージャー 大須賀勝之 様

●説明要旨：

◎東京電力ホールディングス(株)の東京電力廃炉資料館を視察見学

*1988年に開館した福島第二原子力発電所のPR施設「エネルギー館」を、原子力事故を後世に伝えていく場所として、2018年に廃炉資料館を設置した。

*東日本大震災の記憶と記録・反省と教訓

*廃炉現場の進捗状況

*福島第一・第二原子力発電所の事故の概要

平成23年3月11日に発生した巨大地震並びに大津波による原発の停止から廃炉に至る現状を展示・説明。

地震の発生により、原子炉の停止までは計画通りに進んだが、予想を上回る津波により発電所が持つ予備電源が機能を喪失し、冷却が行われず建屋の水素爆発、燃料の焼損、放射性物質の飛散等が発生。

原子炉の1～4号機の現状を事故発生から現在までを紹介。

40年の長期計画により廃炉する。

●質疑応答：

《質疑》地域住民との情報共有や信頼関係の構築について

《応答》この廃炉資料館での展示、ホームページなどで情報を発信している。

地元の新聞社に対して、廃炉作業の状況、アルプス処理水の状況などを定期的に会見し、内容を新聞に掲載して頂いている。

県内の方には、定期的に福島第一原子力発電所の視察と座談会を開催している。

廃炉作業をしっかりとやることを前提として、各自治体地域の復興支援、除草作業や家の片付けなどの対応をする中で、信頼回復に取り組んでいく。

《質疑》原発事故未然防止に最も努力を傾注すべき事項について

《応答》何故、事故を防ぐことができなかったのか、津波対策の不備、過去事故対策の不備、事故対応の準備不足があった。

福島第一原子力発電所は、津波対策ということで防潮堤をかさ上げして、これから予想されている日本海溝・千島海溝地震の対策を実施している。

建物に津波が流入して、非常用電源が水に浸ってしまったがその対策として水密扉を実施。

対応の準備不足では、毎月、社員の訓練を実施し、重機の運転なども行っている。

安全意識、技術力、対話力の不足が背後要因としてあったので、安全意識の高い組織に生まれ変わることに、今日より明日のレベルを高めていく意識を、組織全体が持つことが非常に重要と考えている。

《質疑》福島復興本社を設置し、賠償、除染、復興推進に取り組んでいるが、それぞれの進捗状況について

《応答》まだまだ帰還されていない住民の方や、避難解除の時期によって、周辺自治体の復興の状況が違う。

それぞれの自治体の意向や、住民の方々の希望を確認しながら、復興推進活動を継続していくことが重要と考えてい

る。

復興推進活動については、福島県内で勤務している社員はもとより、今15年目にはいり事故当時の社員も入れ替わっていることから、新入社員研修も含め、東京圏の電気事業に携わっている職員が来て、除草作業やイベント対応などを通して、事故を風化させない研修を行っている。

こういった活動を継続していくことが、福島県に対する責任であると思っている。

《質疑》 廃炉の進捗と課題は。

《応答》 2025年度中に燃料デブリの一部取り出しを予定。

長期的には安全確保と地域理解の両立が課題。

《質疑》 地元雇用への影響は。

《応答》 約6割が地元企業・作業員で構成され、地域経済への一定の波及がある。

《質疑》 廃炉後の最後の姿はどのようになるのか。

《応答》 地元の住民や自治体の方としっかり相談して検討していく。

《質疑》 賠償の内容について

《応答》 個人の賠償、商売をされている方の商業賠償、農業賠償、自治体などの公共賠償等で、現在10兆6千億円。

●感想：

▼巨大地震発生から、原子炉の機能停止、水素爆発、燃料デブリの取り出しから放射性物質の放出、今後の事業の継続などについて説明が行われました。東京電力では、この事故原因の一つに、東京電力側の危険見積りが低かったことを挙げています。東日本大震災のような未曾有の地震への対策には、やはり限度があり、その中で市民が納得できるものでなくてはならないと考えます。

東京電力では、この原子力発電所の廃炉に向けて40年という長期

にわたる事業を粛々と行っています。現場から離れている千歳市においても、まだ東日本大震災は終わっていないことを念頭に、事業に対する危険見積もりが片手間にならないように確実に行われなければならないと感じました。

▼『原子力発電を行うにあたって、放射性物質を漏らさないよう、安全に万全を期していると思い込んでいた。

安全と思い込んでいたものは、おごりと過信に過ぎなかったことを思い知らされた。

あの巨大津波は、事前に予想が困難だったという理由で、天災と片付けてはならない。

人知の限りを尽くした事前の備えによって防ぐべき事故だった。』

東京電力の方の言葉が深く心に刺さりました。

私たちは、便利で豊かな生活を求め過ぎているのではないか。

事故が起こった際の、人々に及ぼす影響の大きさは、想像以上の長期にわたる膨大なものになっています。

便利な生活にはリスクが伴うことを実感しました。

とは言っても、地域の生活の基盤となる基幹産業にもなっていることから、今後も共存していくとの皆さんの覚悟を感じました。

▼東京電力の廃炉資料館では、技術的な難しさだけでなく、地域との信頼関係構築の重要性を改めて認識した。地元雇用の確保や情報公開の努力は一定の前進が見られる一方で、長期にわたる取組が求められることを強く感じた。

▼福島県富岡町の「廃炉資料館」は、東京電力福島第一原子力発電所の廃炉作業の現状と課題を正確に伝える施設であり、原子力災害後の復興と安全確保の取組を学ぶ貴重な場となっています。館内では、

事故の経緯、廃炉工程、放射性物質の処理方法などが分かりやすく展示され、最新の技術や安全管理体制についても映像や模型を通して理解を深めることができました。特に、リスクコミュニケーションの取り組みや、地元住民への情報公開姿勢が印象的で、信頼回復に向けた努力が感じられました。行政としても、地域と企業、国が連携しながら透明性の高い情報発信を行うことの重要性を再認識する視察となりました。

▼悲惨な惨状をテレビなどで見て知ってはいたが、現地の見聞で、あらためて原子力発電は、経済的に必要なのだろうか？
関東圏をスリムにしたら、なくてもよいかなども思う。
使用済み燃料棒の廃棄、核ゴミ等の未来がまったく見えてこない。

▼廃炉資料館は旧東京電力福島第二原子力発電所エネルギー館として運用され、子どもが遊ぶことのできる施設でしたが、平成30年に東京電力廃炉資料館としてリニューアルされた。
全体の感想としては、最初から最後まで謝罪の言葉で溢れ今後このようなことの無いような万全の対策を講じていくという決意を訴えていた印象でした。原子力発電所建設にあたって津波の高さの想定や外部電源消失に関して大きな過失があったことも大きな反省点だとしています。事故から15年経過して今は解け落ちた燃料デブリの一部を取り出したところではあるが、今後の全容はまだ見えておらず40年ともいわれる廃炉期間も40年以上はかかるような印象でした。

▼先の「とみおかアーカイブ・ミュージアム」はどちらかと言えば、町民、その地域で暮らす人の視点的な施設であると言えると思うが、こちらの廃炉資料館は東電、企業側の視点に立った施設であると見

学を経て思ったところである。

事故の経緯や状況、現場の現状がわかりやすく展示・解説されており、当時から14年余り経過する中で事故の状況や原因がうろ覚えになっている人も、見て回ればきちんと理解できる施設になっている、そのように感じた。

その中で、スクリーン等から映し出される映像には「申し訳ございません」を始めとするお詫びの言葉が幾度となく出てくることから、全体的に居た堪れない気持ちになる施設でもあると感じる。

企業だからこそできる展示施設、公では扱いが難しい施設であり、観光には結び付けづらい、産業を理解するためには必要な施設だと率直に思ったことは申し添えておく。

視察目的に関しては、廃炉に向けて1～4号機それぞれどのように作業を進めているのか、現状の到達点がどこなのか、何年にどのような段階へもっていこうとしているのか、企業として問題点をどこと捉えているのか、企業として働く者へどのように活用されているのかといったことが、単に理解できるということではなく、ちゃんと解説含め聞いていくと1時間程度で十分理解できるというものであり、十分達成されたと考える。

(4) 宮城県仙台市

●視察目的：「観光シティループバス るーぷる仙台」について

●日時：令和7年11月7日（金）9：30～

●対応者：公益財団法人 仙台観光国際協会

理事長 結城由夫 様

副理事長 岩間文貴 様

総務部長 佐藤康行 様

観光事業推進課長 武藤 修 様

観光客誘致係主任 滝澤 樹 様

観光客誘致係主事 坂田汐里 様

●説明要旨：

◎観光シティループバス「るーぷる仙台」の概要

*小グループ化、個人化している観光客のニーズに対応し、仙台の観光地を効率的に観光できる交通手段として1999年に運行を開始。

*仙台市、仙台市交通局、仙台観光国際協会の共同事業。

*「るーぷる仙台」の愛称は、LOOPが輪、環状線を意味し、LEは繰り返しの動作を示しており、「仙台のまちをめぐる」という意味。

*レトロ調路面電車風の特殊車両を使用し、仙台駅を起点に15か所の停留所を回る。

*2025年度の乗車人数は、約45万人（一日約1,200人）。

過去最高実績は2019年度の約58万人。

*仙台市観光シティループバスるーぷる仙台は、仙台の主要な観光地を循環するシティループバスであり、仙台駅を発着場として青葉通・瑞鳳殿・仙台城址・大崎八幡宮・広瀬通等を巡る。

*利用料金は、一回乗車券260円（おとな）、一日乗車券630円（大人）などと利用しやすい料金に設定している。

* 使用するバスは、通常のバスをレトロ風に改造したものの8台を順次運航している。

* 観光地によっては観光客の滞在時間が長くなるため、乗車待ちの状態が生起する。

● 質疑応答：

《質疑》「るーぷる仙台」が巡る観光地における観光地域づくりの方向性や課題について

《応答》バス保有台数や乗務員数には限りがあるため、特に土日の場合には仙台城址や瑞鳳殿など人気の観光スポットでは、乗りこぼしが発生するほか、主要な観光スポットが中心部に集中していることで、観光、食事から宿泊までが仙台駅周辺で完結してしまい、温泉のある秋保、作並地区や東日本大震災の教訓に触れられる東部エリアへの周遊に結びつかないなど、滞在時間の延長や消費金額の拡大が課題と考えている。今後とも、観光誘客に繋がる貴重な観光資源の一つとして活用することとし、現在、西部地区で進めている自然を生かしたアドベンチャーツーリズム事業や、東部地区にある水族館や震災遺構など多様な施設への周遊と連動させながら、さらなる活用に繋げていきたいと考えている。

《質疑》観光地を選定するための基準について

《応答》仙台市内中心部を約60分で観光できるというコンセプトのもとルート設定を行った。

2010年からは、仙台城址から直線距離で2キロ北西にある国宝大崎八幡宮までルートが延長され、現在は1周約70分で循環している。

《質疑》運行維持のための財源確保や民間協力の仕組みについて

《応答》仙台市シティループバス運行協議会の主な収入は、仙台市か

らの負担金 260 万円及び広告収入約 120 万円。

広告収入はリーフレットへの企業広告を指し、9 団体に協力いただいている。

また、乗車促進のため、一日乗車券を購入された方限定で、ホテルや観光スポットで割引が受けられる特典の付与について協力いただいている。

《質疑》シティループバスの導入効果は。

《応答》市内観光地間のアクセスが向上し、観光消費額の増加が見られる。

外国人観光客の利用も増加傾向。

《質疑》今後の課題は。

《応答》運行コストの確保と、デジタル観光情報との連携強化が必要。

●感想：

▼市内を巡る乗り合い観光バスですが、レトロ風に改造しているため、これとすぐにわかる全容が可愛らしいと思いました。せっかくの仙台市内の観光なので特別感が持てて、観光客には評判が良さそうだと感じました。

また、この事業の実施にあたっては、仙台国際観光協会の一事業者だけではなく、仙台市文化観光局、仙台市交通局など複数の事業者が役割を分担して行っているため、運転手不足や経営状況悪化などのリスク軽減につながっているように思えました。

当市においては路線バスの運転手不足に対応するために、バス路線の減線、自動運転バスの検証やオンデマンドバスの検証、大型自動車運転免許を保有する退職予定の自衛官に対するバス運転の紹介などを行っていますが、目的に応じて市やバス業者だけではなく、多くの関係機関が参画して運転手不足問題に取り組む必要があると思います。

▼大型観光バスで観光地に行く時代は終わり、タクシーやレンタカーで観光する人が多くなっています。

仙台市の観光シティループバス「るーぷる仙台」は、観光客にとってリーズナブルに観光地を回れることで、とても人気のある観光バスです。

我々も試乗する予定でしたが、行列ができており断念しました。

千歳市には、仙台市ほど観光地が多くありませんが、支笏湖から水族館、キウス周堤墓群やパレットの丘などの観光地を巡るバスがあれば、多くの人々が千歳市にとどまってくれるのではないかと思いました。

また、新たな観光スポットをつくることも課題の一つであると思いました。

▼仙台市の観光シティループバス事業では、行政と観光協会、民間事業者が一体となった仕組みづくりが成功の鍵であることを学んだ。交通利便性の向上と観光消費の拡大を両立する取組は、本市の観光施策にも応用可能であり、地域資源を活かした官民連携の推進が今後の課題であると感じた。

▼仙台市観光国際協会による「観光シティループバス（るーぷる仙台）」の行政視察では、観光振興と公共交通の連携による地域活性化の取組を学びました。主要観光地を効率的に巡回するルート設計や、多言語対応の案内体制、デザイン性の高い車両など、観光客の利便性と満足度向上を重視した運営が印象的でした。また、運行データの分析を通じた需要予測や、民間事業者・行政・観光団体との連携による持続的運営体制も高く評価されます。特に、地元商店街や文化施設との連動企画は地域経済への波及効果が大きく、地方都市における観光交通政策の先進事例として参考になりました。観光と交通の融合

によるまちづくりの有効性を実感する視察となりました。

▼る一ふる仙台という観光循環バスは1周60分を基本として現在は70分間で観光地を巡り15分間隔で運行されている。観光地も15ヵ所となっており観光客には人気のバスだった。バス1台に50名乗車なので混雑する時間帯は乗れない場合もあるようですが増便は無いようでした。仙台市の観光スポットは市内中心部に数多く存在していることから、千歳市に同様の導入を考えた場合、主要観光スポットの数についても運行ルートを選定についても課題があることから、今後、観光スポットの開発を含めた総合的なプロジェクトが必要になると感じました。

▼まず、目的について、ループバス試乗は乗車予定の便が観光乗客40名近く先に待機しており乗車困難だったため未乗車となっていることを先に申し添えておく。

日本の観光地として有名な仙台で、観光地域づくりをどのように進めてきたのかを中心に話を伺ってきたものである。

他の委員から、観光タクシーについて等様々な質問がされる中、私は委員会の事前質問にあった財源確保とは別に、ループバスの全体的な予算や決算状況を追加で伺った。

理由としては、宿泊税を検討している千歳市で宿泊税が導入されたときに用途の一つとして用いられる可能性や観光振興をする中で民間の路線バスだけでは限界があり、交通網の拡大が必要で、どのくらいの費用感で運営しているのか知りたかったからである。

回答は、詳細な金額までにはうかがい知れなかったところである。

空港がある街という点で、市街地等の観光場所にインバウンドが多

く流れてくれずにほかの地域に流れるというのが共通している一方、人口の大きな差や駅周辺の発展度含め、千歳市の参考になる面も多少あるが参考で比較できない部分が多いなとも感じたが、観光地域づくりではループバスの活用を含め、発信を積極的に行っている方ではあると思い、千歳市に足りない観光の取り組みが何かは浮き彫りになるものでもあった。

視察目的は、試乗が叶わず一部未完となるものの、観光地域づくりの参考になる話が多く目的に資するものであったと思う。